南十字星

大阪大学外国語学部
（旧大阪外国語大学）
ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ語同窓会

2010年秋　第11号
発行　南十字星会

連絡先　大阪府池田市五月丘 2-5-113-402
電話 Fax　072-753-1693
Email　rocky3@wombat.zaq.ne.jp

新しい世代の成長を信じて

木　下　　一　（'61卒）

私が初めてインドネシアの地を踏んだのは1960年の3月、外大3年生の時である。マレー連邦（当時）の首都クアラルンプールで行われたアジア学生会議に参加した後、シンガポール、インドネシア、フィリピン、ベトナムの学生生活の実態を視察して回る機会を持つことが出来た。灼熱の太陽の下で緑が美しかったマレー、シンガポールとは違い、訪れたジャカルタは街全体が茶色っぽく、幅広い道だけが異様に目立った。しかし、親しくなったインドネシアの友人宅に泊めてもらったジャカルタ、バンドンでは家族ぐるみで親切にしてもらったことが今でも印象深く記憶に残っている。

☆ジャカルタからシンガポール、マレーシアへ

卒業後は松下電器貿易（現パナソニック）に入社し、64年にインドネシアへの駐在を命じられた。当時のインドネシアはスカルノ主導の政治的混乱期であり、フィリップスと技術提携関係にあった松下電器が現地フィリップスの工場に資材の一部を供給することになっていたので、そのフォローアップが主な業務であった。戦後賠償で建設されたホテルインドネシアの2階に事務所兼宿舎の一室を借り切ってスタートした駐在員生活。好奇心に満ちた無我夢中の毎日であったが、同じく賠償で建築されたSARINAH百貨店のオープンに備えて電気製品の一括供給の契約に成功し、後に合弁を果たすことになったゴーベル氏の工場でラジオ、テレビ、扇風機をはじめ一連の電気製品の組み立てをスタートすることになった。

この間日本から巡航見本市船“さくら丸”が日本製商品を展示してタンジョンプリオク港を訪れ、初日にはスカルノ大統領が出席し日本語で“愛国の花”を歌ったことを覚えている。

しかしながら、65年9月30日に勃発したクーデターにより全てのビジネスは暗転し、外出禁止令の続く中、最初の駐在生活は1年余りで終わることとなった。その3ヵ月後にはシンガポールの代理店（オランダ商社）に駐在、そして67年にはクアラルンプールに建設されたマレーシア松下電器に出向した。シンガポールでは“血債問題”（戦時中に殺された華人の人骨が建設地から数多く発掘され反日感情が蔓延）、マレーシアでは人種暴動（マレー人による華人商店の焼き打ち）など行く国々で必ずといっていいほど暴動・外出禁止令に遭遇した。シンガポールのSouth Bridge Roadのそばに今も聳え立つ慰霊碑は、当時の反日感情を沈静化するために日本政府が建立したものである。

日本が経済大国の階段を上り始めた時期にアジア各国でこのような事件が続発し、日本の海外事業は厳しい環境の中で育ってきたことになる。この間、インドネシアではスハルト政権が誕生し1967年に外資法が発表された。インドネシアも外資導入、技術移転、雇用増大を旗印に経済建設への一歩を踏みだしたのである。

☆PT National Gobelの設立

1970年代は日本企業がこぞってインドネシアに進出し、次々に合弁事業による生産活動を開始した時期である。SARINAH百貨店への電気製品の組み立て生産が縁で知り合ったゴーベル氏はマレーシアにいた私を訪ねて松下との合弁を模索していた。

㊧からゴーベル氏、筆者。松下幸之助氏＝1971年

スハルト大統領への表敬と報告＝1980年　㊧ゴーベル氏、㊨松下正治会長（当時）

出席し、松下幸之助に経営状況を報告しながら数々のアドバイスを受ける貴重な時間帯があった。松下幸之助が私をインドネシアに送りだす際のはなむけの言葉は“ゴーベルさんの嫁さんになったつもりで仕事をするように”であった。

当時会長職にあった松下幸之助はゴーベル氏の強い愛国心と情熱溢れる真摯な姿勢をこよなく愛し、アジアの将来に期待して常にゴーベル氏を激励し続けた。遂にはゴーベル氏が松下から学んだ究極の企業経営、国家経営の鍵となる人材育成のために100万ﾄﾞﾙを寄贈し、若きインドネシア人経営者育成のための教育財団設立をも具体化させたのである。この教育財団は現在JETRO、AOTSの支援を得ながら年々人材育成の輪を広げている。

最終的に70年の7月に条件が整い、資本金120万ﾄﾞﾙの合弁会社PT　NATIONAL GOBELが誕生した。松下側からは私を含めて4人が出向し、ゴーベル氏のCAWANG工場で130人の従業員と共にラジオ生産がスタートしたのである。70年代当初の日本企業のラッシュはすさまじくインドネシアへの外国投資の25%強を占める勢いで、そのオーバープレゼンスが問題になり始めていた。日系企業の多くは資金力、商売経験の豊かな華僑との合弁でありPT　NATIONAL　GOBELは資金、企業経験の乏しいプリブミとの合弁企業として何かと揶揄され、正直周りから競争の激しくなってきた先行きを危ぶまれることも少なくなかった。しかし、松下幸之助の「海外進出はその国に真に貢献し、社会から喜ばれるものでなければならない」という強い方針に沿って、時間をかけながらも辛抱強く進められることになった。

1974年1月の田中首相訪イの際に起こった反日暴動の際には多くの日系企業が投石や焼け打ちにあった。NATIONALはプリブミということで対象から外れ、従業員が身を持って守りきり、以後プリブミ企業としての自負と誇りを高めることになった。ゴーベル氏は反日暴動の中で唯一現地新聞に「田中首相歓迎」の広告を載せるという勇気ある行動を取り、プリブミ親日派として日系企業の間で評判を高めた。それが契機となり当時日系企業のイメージとなっていた“テレックスマネージメント”“エコノミックアニマル”という悪評を打ち消す先鞭をつけたHIMPUNAN（日本インドネシア合弁企業家協会）が組織された。日イ両国間の文化摩擦、“我”の主張から起こる数々の問題を“SALING　MENGERTI”“SALING　PERCAYA”“SALING　MENGHARGAI”をモットーに掲げて一体感と協調精神を育みながら新しい経営スタイルを作り上げるようになったのは、この反日暴動が契機になっていたことも事実である。

私とゴーベル氏との信頼関係は様々な問題を根気よく話し合いながら解決する中で年々強まっていったが、その背景には毎年松下電器の経営方針発表会に2人で

ゴーベル2世と松下政経塾へ＝2009年

70年代にラジオ、テレビ、扇風機から始まった生産活動はラジカセ、洗濯機、冷蔵庫、部品、エアコン、ポンプへと広がり“ミニ松下”の様相を呈した。この間松下幸之助の指示を受けて営業畑出身の私は、製造担当副社長の特訓を1カ月日本で受けることになった。

80～90年代の輸出促進期を経てPANASONICグループの事業体は現在10数社、従業員数も10,000人を超える大所帯になっている。ゴーベル氏の夢であった全国各州への支店設置や裾野産業・中小企業育成の計画も順次進んでおり、経済の発展と共に着実に具現化されつつある。これらの底辺に流れるのは松下式の大家族的な経営スタイルであり、インドネシアの土壌に合った形でさらに大きく成長することを期待している。

残念ながらゴーベル氏は83年に病に倒れ53歳の若さで世を去った。その結果、私のインドネシア滞在も89年まで大幅に長引くこととなった。

☆本格的なインドネシアの発展

着任当時7歳であった長男のラフマットは、私の在任中に中央大学に留学し、現在ゴーベルグループの総帥として活躍していることは喜ばしい限りである。80年代の輸出促進、90年代の製品棲み分け生産によるグローバル化対応の時期を経てインドネシアでの事業は、速度を上げてきた経済発展の中で、大輪の花を開かせる時期も近いと確信できる。

2000 年に松下電器を退いた現在もインドネシアとの絆が様々に続いている内容についてもう少し書き綴ってみたい。

退職後、イ政府からの依頼で自由貿易港を目指すバタム島の開発計画のお手伝いをすることになった。お蔭で今も年に 4～5 回はインドネシアに出張する機会があるが、このところ現地で会って話し合う世代は全て私が以前滞在していた時期の親父さん達の事業を継ぐ 2 世が大半である。

ゴーベル 2 世をはじめ、サプライヤーの事業継承者も殆どが海外での留学を終えたピカピカのビジネスマンが多い。彼らの多くは IT を駆使して斬新な経営手法で親父世代からの遺産を着実に拡大している。親父さん方と会っても、誇らしげに息子たちを紹介してくれる顔には自信と誇りがみなぎっていて頼もしい。

昨年招かれた労使関係のセミナーで 20 年ぶりに逢った M 君は NATIONAL GOBEL 時代の組合の委員長であり現在日本で言うところの連合の委員長を務めている。70～80 年代に毎年のように松下で行われた組合大会に派遣していたが、その彼が“日本で労使関係を学んだことが今日の私を作り上げてくれた”と自信に満ちて話す。“何かあればお手伝いしたい”ともいってくれた。

私が社長時代に採用した残留日本兵の遺児である H 君は今ゴーベル 2 世の右腕として日イ友好関係を支えている。残留日本兵の 2 世、3 世をサポートしている“福祉友の会”の会長を務め、彼らに日本語を学ばせている“ミエ学園”（故小倉みえさんの基金で設立）の経営責任者として“志士の心”を持ち続けることをモットーに 2 世、3 世の社会を支援し続けている。

これらの頂点に立ってゴーベル 2 世のラフマットはギナンジャール氏の後を継いで現地のインドネシア・日本友好協会の理事長を務め、KADIN の副会長の立場ともども日イ友好の絆をさらに強めたいと日イ間を頻繁に飛び回っている。

私がこのところインドネシアへ出張するときの楽しみはこれら 2 世と会って話合い、彼らの新しく力強い息吹を感じるときであるといっていい。

加えて、訪れる先々で今もって新しい発見に遭遇する。バタム島に連なるレンパング島を巡回した折には、戦争直後この島に 10 万人を超える日本兵が抑留されていたという事実を知った。当時ジャングルだけのこの地域で亡くなった兵士の墓地が残されており、地区の村長さんが墓守をしていて当時をしのばせる数々の地図や手書きの書類を見せてくれたのである（この件はその後テレビ局のプロデューサーと共にフォローし当時の実態を追い続けている）。

この 6 月には大阪府と姉妹都市関係にある東ジャワ州の知事一行が訪日し、大阪で初めて投資誘致のセミナーを行った。

バタム島開発の経験を踏まえ、新たに完成したスラバヤとマズゥラ島を結ぶ大橋（写真㊤）を中心とした開発事業のお手伝いを頼まれた。70 歳を超えた身に少々荷が重いが、インドネシアの若い世代の力を信じてお引き受けすることにした。

インドネシアの力強い発展を見ることが私に元気を与えてくれると信じているからである。

バタックのギターと歌 大阪で演奏会

アングル

インドネシアのメダンを拠点にして活躍しているユニット Suarasama（スアラサマ）が来日、8 月 13 日午後、吹田市の国立民族学博物館で大阪公演を行った。「インドネシア・バタックのギターと歌」と題したリサイタル。いくつかの弦楽器を“聴き比べる”という趣向だった。

全部で 14 曲が演奏されたが、その大半が奏者の Irwansyah Harahap（イルワンシャ・ハラハップ）さんが作曲したもの。妻の歌手 Rianthony Hutajulu（リアントニ・フタジュル）さんとは、米シアトルのワシントン大学で知り合って、1995 年に Suarasama を結成したという。

世界的に高い評価を得た「Fajar di atas awan」（雲の上の朝日）、アフリカのリズムを取り入れた「Perang」（戦い）のほか、民謡の“乾杯の歌”（「リソイ」Lissoi）も披露。楽器の方はイスラムの弦楽器「ガンブス」、バタック伝統の小型弦楽器「ハサピ」、そして「ギター」と、彼の独自楽器「サズ・ギター」を交互に奏でた。

最後に特別出演の石濱匡雄、横沢道治のお 2 人が加わりシタールとジェンベ（両脚で挟むドラム）でコラボ演奏をした。

キャンパス便り

大阪大学　人間科学研究科
グローバル人間学専攻 准教授　福岡まどか
（外国語学部インドネシア語専攻担当教員）

I Wayan Simpen 先生

シンペン先生

専攻に新しいインドネシア人の先生がいらっしゃいました。イ・ワヤン・シンペン先生です。ご専門は言語学で、バリ島のウダヤナ大学に籍を置き、教鞭をとられてきました。詳しいご専門については自己紹介される機会もあると思いますので、私の方からは主に日本でのこの4カ月余りの様子について紹介いたします。

新学期開始直前の3月31日に来日されたシンペン先生ですが、今回の来日が初めての海外だそうです。思いのほか寒かった4月から、梅雨、猛暑になった7月までの4カ月間、箕面キャンパスと豊中キャンパスで多くの授業を担当して頂きました。駅や街中に英語の表示が少ない日本での生活は、少し戸惑いもあったようですが、だいぶ慣れてきておられます。箕面市小野原の教員住宅にお住まいであるため、最も近いのは吹田キャンパスです。吹田を拠点に学内バスに乗って、豊中での1年生の授業や箕面での授業や研究に来られることが多いようです。

日本の印象をお尋ねしてみたところ、「キャンパス内でこの4カ月間に桜をはじめ多くの花(つつじ、紫陽花など)を見て、日本では季節の移り変わりに合わせて様々な花が楽しめることを知った」と答えてくださいました。学生たちとのコミュニケーションも最初は難しい面もあって、特に1年生とは英語を交えながらのやり取りがしばらく続いたようです。でも、先日1年生に訊いてみると「最近ではわからないことをインドネシア語で質問できるようになったので大丈夫です」という頼もしい感想でした。先生はこの夏休み、バリ島に初帰郷されました。日本での第2セメスターは初めて体験する冬もありますので、お元気で過ごされ、また授業を楽しまれることを期待しています。

キャンパスの様子

今年度も13人(日本語専攻の1人を含む)の元気な1年生が入学しました。そのうち男子学生は2人です。私は今年1年生の授業を担当していないのですが、先日、インドネシア料理を一緒に食べに行きました。中津の「バグース」というお店に行ったのですが、印象としては学生同士の仲が良く、様々な事柄への疑問や関心を素直に表現してくれると感じました（写真㊨）。

2・3・4年生は、シンペン先生とのインドネシア語のやり取りにも慣れ授業も頑張っているようです。新たに箕面キャンパスに移った2年生からは「毎日が楽しい」という声を聞きます。11月には2年生有志が東ジャワの民話を題材にした語劇を上演する予定です。

今年は卒論に取り組んでいる学生が7人います。テーマは非常に多彩で「日本軍政下の教育」「インドネシア語教育」「バティックのデザイナー」「看護師・介護士問題」「文学作品に用いられる英語表現」「イスラーム」「アチェの学校教育」についてなど。まだ細かい点で検討・模索中という部分もありますが、夏休みに調査に出かける学生もいて、今後の執筆の進展を期待しているところです。一方で、就職活動も頑張っています。就職難でなかなか内定が決まらなかった学生もいますが、夏前には何とかなったような状況です。

来年から(新生阪大生は)卒業論文が必修となるため、金曜日2時限目に3・4年生合同で卒論ゼミを行っています。3年生はインドネシアに関する英語論文の講読に取り組み、ミニ卒論のテーマを考えています。インドネシアという地域は研究テーマの宝庫でもあります。自分なりの関心を広げていって欲しいと願っています。

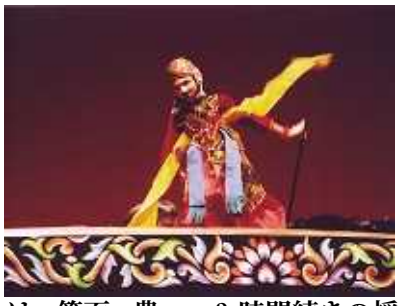
夏祭り

7 月 10 日の土曜日、箕面キャンパスのグラウンドで恒例の夏祭りが開催され、1 年生が民族衣装コレクションに出場しました。音楽の資料や衣装は箕面の共同研究室にあるのですが、1 年生の授業はすべて豊中で行われているため、授業の合間をぬって箕面に集まって音楽や衣装の選定をしていたようです。バリのガムラン音楽を使って、色とりどりの衣装で登場し、息の合ったパフォーマンスを披露してくれました。男子学生 2 人も出演、皆で楽しそうに過ごしていたのを見て、私も大変嬉しく思いました。

また今年の夏祭りには、4 回生の有志が集まって、お店も出しました。メニューはインドネシアの焼きそばですが、クウェティアオ・ゴレンという太めの麺を使ったものです。きしめんを使って、インドネシアの調味料(ケチャップ・マニス)とチリ・ソース(サンバル)で味付けしたのが特徴。

私も試食しましたが、ピリ唐の麺がとてもおいしかったです。

授業紹介



最後に教員の研究テーマに触れるのが恒例ですが、芸能研究という私のテーマは以前に書いたものとそれほど大きく変わっていません。特に第 1 セメスターは、箕面、豊中、吹田の 3 つのキャンパスで、たくさんの授業に追われて過ごしました。インドネシア語専攻に関わるものから、人間科学部での授業、理系の学生も受講する共通教育まで様々な授業を行ったので、今回はその一部を紹介してみたいと思います。

東南アジア文化演習 G：外国語学部生(3・4 年)向けの授業で、インドネシア語専攻に限らず東南アジアの様々な専攻語の学生を対象としています。今年度は「東南アジアのポピュラー音楽」を取り上げました。伝統芸術の宝庫である東南アジアですが、ポピュラーカルチャーも非常に豊富で興味深いものがあります。外部講師として FM 大阪の DJ であり心斎橋で輸入 CD のお店を主宰する丸橋基さんをお迎えしての講演会も開催。学生たちも大変面白い発表をしてくれました。改めて東南アジアのポピュラーカルチャーの面白さを実感した授業です。

東南アジア文化演習 C，D：こちらは、ベトナム語とフィリピン語の先生との合同です。外国語学部生(3・4 年)向けの授業で、今年度は「東南アジアにおける食文化、身体、ジェンダー」というテーマを設定しました。私の担当分野は、「ジェンダー」です。芸術におけるジェンダー、社会生活におけるジェンダーなど、様々な問題意識から文献講読、講義、ディスカッションを行いました。2 時間続きの授業で受講生も 60 人近くいるため、体力も必要な授業です。他地域の専門の先生方と組むメリットは、大きなテーマを設定し、その地域的な多様性について議論することが可能な点です。専門とは異なるテーマにも取り組みましたが、新たな発見も多くありました。

地域知識論特講：人間科学部の学部生と大学院生向けの授業です。今年度は、モノ作りを通して「ローカルな知」のあり方を考えることを目的としました。生活用具や楽器などの製作工程を考えながら、グローバル化する現代社会における技能の継承の問題なども扱いました。

国際教養・アジアの文化と社会を知る：全学の学生向けの共通教育の授業です。今回のテーマは「東南アジアの上演芸術」です。音楽、演劇、舞踊、楽器、物語世界、など多くの学生に興味を持ってもらえるように、視聴覚資料も多用して授業に取り組みました。理系の学生も多く、初めて触れる東南アジアの芸術に率直なコメントを寄せてくれました(カット写真は西ジャワの人形劇)。

他にも人間科学部の学生向けのインドネシア語の授業や人間科学部のゼミ、大学院生のゼミ、様々なリレー講義がありました。授業を通して私自身の研究テーマも柔軟で広がりあるものになるよう、頑張ります。

ジャカルタ発

銀行マンとして

中村　英樹　('87 卒)

大学を卒業してから銀行に就職し、1994 年 5 月に初めて業務赴任。地場の華僑を顧客とした営業を担当しました。1997 年の通貨危機勃発までは内外各銀行とも積極的に企業融資を推進し、今から思えば加熱気味でまるで麻薬漬けのように貸出競争をしていたように回顧します。

通貨危機以降は不良債権の処理に奔走、裁判所では手数料を要求されたり、債務者による裁判官の買収にあったり、また銀行が差し押さえした工場を訪問すると従業員に投石されたり、様々な苦労をする中で学んだことも多々ありました。経済混乱は政治の混沌にまで繋がり、1999 年 10 月に Wahid 大統領が選出されたところで、約 5 年半の現地でのアサインメントを終えて帰国。その後 2002 年 5 月に再び業務赴任し今日までに至り、今回の赴任期間は 9 年目になります。

2002 年以降は国内の自動車(2 輪･4 輪)販売が好調で、我々の注目もこの波を商売に取り込めないかということで、業界について勉強したものです。まずは銀行として販売金融会社への企業融資から始まり、次に販売金融会社のローン債権を買い取り、そして最終的には販売金融会社そのものの買収にたどりつき、その買収プロジェクトを完了しました。

Megawati 政権後期から Yudoyono 政権に切り替わる時点で多少混乱はありましたが、その後も内需伸長は堅調で、住宅・自動車・家電・家具等の耐久消費財の購買がファイナンス付きではありますが右肩あがりに伸長してきています。

その後 2007 年末に、更に消費の現場に市場を求めるべく買収した地場銀行への出向を命ぜられ、それが現在の BNP(Bank Nusantara Parahyangan)の職務です。 私の親元の銀行グループは当地のリテールバンキング業務を将来の成長分野と位置づけ、中小銀行ではあるが布石として出資したものでした。30 年ほど

BNP の株式総会のあと、筆者は左から 2 人目

の歴史があり、直近約 20 年を引率してきた経営陣との協働経営でスタートしたため、2008 年は内部を理解し調整しながら経営基盤を醸造すべく努力をしてきました。買収にはつきものですが、旧体制勢力と新体制勢力との軋轢や方針の違いも多々あり、最後は理念的なところで衝突し理論的な議論にはならないので収拾が付かないこともありました。漸く 2009 年に方向性を固め、同年 8 月末には経営陣を組み替え、プロフェッショナルな、より透明な経営体制で事業を再スタートさせることができました。

大手地場銀行のネットワークや知名度には到底及びませんので、まずはよりニッチな分野で、また顧客により近いところで、より便利なサービスを提供する、顧客に選択されるリテールバンクを目指しています。

本店のある Bandung を州都とする西ジャワ州、そしてやはり経済の中心である Jakarta 及び周辺である Jabodetabek 地区、および Bali を最重点戦略地域とし、知名度の向上、拠点網の充実を緊喫課題として日々邁進しております。通常大手銀行が出店する、所謂銀行ストリートばかりではなく、人の集まる市場やモール、しかもミドルないしミドルローレベルのリテール社会に顧客接点を求めています。

中国・インドについで内需伸長が堅調で将来に向けても成長していくといわれる当インドネシアにおいて、リテール銀行を目指す現在の業務をこなしていく中で私が体感学習できたことは、やはり人の集まるところを見て人および現金の流れの法則を知るということが重要であるということです。自分でその場に立ち、困った人を見つけ、そこにアイデアを出せばいくらでもビジネスモデルができるということです。

銀行の支店開設時に、スタッフがそろって記念撮影

自分自身では体感ありませんが、日本でも戦後から昭和30年代前半まではそのような時代であったのではないでしょうか。インドネシアでも今漸く、勤勉に働くと昇給され、ローンを組むと返済意欲のためさらに勤勉に働くという、サラリーマン所得倍増計画が議論されていたころの日本に酷似しているのではないでしょうか。もっとも、計画的に詐欺的に借り入れを踏み倒してしまう人達もいますが、それはどの国でも同じことでしょう。

また、事業性ローンの機会も裾野は広いです。中小とりわけ零細事業者にとっては、銀行というものと普段関わらないので、決済性預金で資金管理することすらまだ知りえません。利益や手許資金はタンス預金や貴金属で保管し、また短期の資金融資を受けることで貯蓄を減ずることなく事業や商売を回転させ、さらに利益・貯蓄を得ることには考えが及びません。よくよく聞くと資金がないから事業拡大できず、利益はあるけど伸びないと悩んでいます。そこでその人達の近いところに出向き、彼らの言葉で提案しビジネスパートナーになることで商機を見出す、というモデルを追いかけています。

例えば、各地の公設伝統市場などでは卸業者と仲買人がセリを行うのですが、仲買人は現金の持ち合わせがなく、ただし同市場に行き交う関係者のBehavior（仕振り）のTrack Recordを把握・分析することで、資金立替ファイナンスを行うことができるのです。小さな小売店が集積するミドルロークラスの商業モールでは、基本的に銀行の営業マンが日参し売上金を回収、顧客の資金管理をしながら必要資金（借入）の提案を図っていくというものです。

顧客との話し合いも営業マンが出向いて

これまで数ある邦銀の銀行マンも、当地で業務する上では基本的な考え方が企業融資（コーポレートファイナンス）であり、業務もその領域に限られていたように思います。このBehaviorのトレンドを追いかけながらリスクテイクし、ポートフォリオ管理をしていくという業務は、私にとっても始めての体験です。

バリでは恐らく邦人の若者たちであればクタのポピス通りあたりを歩いていたりするでしょうが、我々企業人であればとかくヌサドゥアやジンバランなどのリゾート地に休暇を求めるのが大半ではないでしょうか？しかし、ポピス通りを歩いてみると、地場銀行のATMに英語やなんと日本語の案内まで記載されているではないですか。外国人旅行者が自国の銀行のATMカードを挿入するだけでルピアを引き出せるものです。ひとつひとつの取引は小さいですが1日に1台のATMで100や200の取引があるそうです。

都市部に下宿を借りて大学に通う学生もパソコンは必携です。田舎に帰省するとき、費用の捻出に思案、一方留守中パソコンを下宿において置くのも不安。ここでそのパソコンを担保に帰省費用をファイナンス。返済は親御さんの口座からといったファイナンスビジネスモデルです。もともと当初パソコン購入時に割賦販売金融も付けていたものです。また、大学の定期的な費用支払は親御さんの口座からの引き落としというものです。

銀行と大学そしてパソコン等の販売会社と提携し、人・資金の動きそして何がお困りか、そこにアイデアを出し隙間ファイナンスを提案していく、こういったビジネスモデルをリテールバンキングとして追い求めています。

インドネシアでは今なお、貧富格差是正と更なる経済成長が大きな政治的課題です。リテールバンキングで国民の夢と希望、また事業意欲を高めることで、少しでも貧困層の中から中間層と言われる層を創出したいという政府。その過程で少しでも日本の企業人として貢献できれば光栄だと思って日々業務に取り組んでいます。

寄稿　Apa & siapa

私の原点

大森　靖彦（'66 卒）

このたび南十字星を通してなつかしい皆さまにお会いできる喜びを感じています。このような機会をいただき感謝しています。

卒業して 45 年、私はインドネシアとは全く縁のない生活を送ってきました。その意味で何か肩身の狭い思いもしています。しかし、大阪外大に進学していなかったら、私の人生は全く違ったものになっていたことでしょう。インドネシア語の同級生の皆さんとの思い出はとても温かく、尽きることがありません。

退職後に建てたギャラリー「アートれい」　㊦は遠景

4 年間所属した陸上競技部での生活は、私の進む道を決定づけました。専門は短距離でしたが、陸上競技部での活動の場は、未熟な私の修養の場として（今から振り返れば）魅力的な所でした。

先輩、同輩、後輩、喜び、感動、そして数多くの挫折…それらはまさに人生の縮図でした。私は、迷わず教職の道を選びました。

郷里である栃木県の高校教師（英語科）になり、退職までの 38 年間陸上競技部監督として全力を投入してきました。そして、退職してから今も指導のサポートをしています。人間が生きていく上で必要と思われる知恵、信念、栄養として必須な感動、土台として持っていたい忍耐力…。それらを私は大阪外大陸上競技部で学んだように思います。

今度はそれらを高校生たちと共有したい、競技力が高かろうが低かろうが、高校生に胸に熱いものを持つ

ギャラリー近くの滝で彫刻作家と並んで撮る。㊨が筆者

人間になってほしい。その一念で雨の日も風の日もグラウンドに立ってきました。間接的にでなく、直接生徒に接したい、今日の生徒は昨日の生徒ではない、いつも自分の眼で生徒を見守っていたい、それが私の唯一の指導理念です。

退職後の 2005 年、自宅から 3 ㌔の所にギャラリーを建てました。名付けて「アートれい」。“ゼロからの出発”という意味も込めました。

「なぜ？」と驚く人がいますが、私の中では全く違和感はありません。と言いますのは、どんなスポーツも、私が関わってきた陸上競技でも、最後に求めるものは≪美≫だと思っています。走る時の姿、チームワーク、他人への挨拶それらは美しくなければいけないと思っています。「この生徒の良いところ（美しいところ）は何か？」といつも考えています。そしてそれを見つけ出すよう取り組み、今も努力しています。芸術の求めるのは≪美≫。スポーツも同じです。

私は絶えず、美術館やギャラリーに行って多くの作品に接しています。自分の感性に合う美を求めて。そして年に４～5 回、妻と企画して、作家の個展とミュージシャンのコンサートを開いています。栃木に来られる時はぜひご一報ください。

コンサート・津軽三味線の演奏

（Email; shunieru@sea.plala.or.jp 電話 090-4729-0513
美術館は JR 烏山線滝駅を下車して徒歩約 8 分）

寄稿　Apa & siapa

御縁と感謝

中嶋　望　('08 卒)

大学在学中、ホームステイ先の家族と　'05年スラバヤで

いつ「南十字星」を拝見しても、懐かしい思い出が鮮明に甦ってきます。私は平成20年度卒業、大阪大学と統合して初めての卒業生でした。

少しの間、私の思い出話にお付き合いいただきたいと思います。

インドネシア語専攻を選ぶことになった機縁は、受験前年にたまたま家族旅行でバリ島を訪れたことでした。「大阪外大に進学してアジア言語を学びたい」ということはすでに決心していたのですが、その中でどのアジア言語を選ぼうかと考えた際、浮かんできたのは、そのバリ旅行での楽しい思い出でした。

㊧職場の興正寺㊨「花まつり」行事で、東本願寺のキャラクター・鸞恩くんと

在学中も仲良しインネシーズとして楽しく学んでいました。中学→高校→大学とだんだん自分の好きな道を歩むにつれて、より気の合うマニアックな仲間に出会い、今でも連絡を取り合っています。また、高校から始めたハンドボールを大学でも充実して続けられ、4年間で卒業することが出来たことは、良い意味で『外大の楽園』と呼ばれるインドネシア語科の温かい先生方のおかげと心より感謝しています。

「書きたくない」と思っていた卒業論文も、松野先生の「え？卒論書くでしょ？」という軽いけれども重い問いかけで、咄嗟に「はい」と答え、書くことになりました。案の定、急ごしらえで書いた卒論は中途半端に終わりましたが、扱ったテーマはバリ島のヒンドゥー教と日本の浄土真宗を比較するというものでした。今思えば、浄土真宗の知識すら少ない中、よく無謀にも挑戦したものだと感じますが、このことも現在の職を選ぶきっかけになっていたのかもしれません。

現在は京都府にある、真宗興正派本山興正寺の宗務所でお勤めさせていただいています。私の実家はその真宗興正派の末寺です。毎年同じ時期に職員を雇う普通の職場とは違うので、語学留学から戻ってしばらくして職員募集の連絡をいただいたときには、大きな御縁を感じました。やっと1年無事に勤めさせていただくことが出来た新米ですが、年末年始の除夜会、修正会には勤行出勤させていただきました。寒さと長時間の正座のため、倒れて両足にヒビが入るという大失態もありましたが、周りの環境にも少しずつ慣れてきたところです。外大で学んだこととは別の分野のことを日々必死に学んでいる最中です。今まで学んできたことは知識として私の中にいて、別の畑からやってきた私だからこそ柔軟な発想で学ぶことが出来て、何一つ無駄なことはないと改めて教えられているようです。

人生の岐路に立ったとき、今の道を選んだことで現在に至り、またこの先も様々なこと、人との御縁に支えていただいて歩んでいくのだ、生かされているのだと感謝の気持ちを持ち続けたいものです。少しでもその感謝をお返しさせていただきたいと思い、わずかながら毎回協賛金をお送りさせていただいていることが、編集の岩谷様の目にとまり、投稿のきっかけとなりました。毎号楽しみに読んでいる南十字星の大ファンの母がとても喜んでくれていて、「コーヒー4杯我慢するぐらいの協賛金なら毎回しよう」と意気込んでいます。

私のこの投稿がまた次の人の御縁へと繋がり、南十字星の輪が広がり、多くの人々に支えられる温かい南十字星が、より多くの人の喜びとなることを切に願っています。

寄稿　Apa & siapa

できそうで出来ないこと

大橋　潤（'05 卒）

バリ島のウブドゥで（筆者㊨端）

卒業後は 1 人暮らしをしてきました。実家に郵送されてくる会報に、帰郷するタイミングで目を通し、その度にインドネシアについて懐かしいなあ…と。そんな私が、今回のような機会を得るとは思っていませんでした。でも、この機会を利用して、自分とインドネシアとの関係を振り返ってみようと考えました。そして、大学時代～卒業後 5 年間～そして今後について、の 3 つに分けて、まとめてみました。

まず、1 つ目の大学時代ですが、思い出深く残っていることのひとつが 2001 年～02 年にかけてのバンドゥンへの留学です。生きている（生きていく）ことを実感した 1 年でもありました。

バンドゥンの北側にそびえる火山タンクバンプラフで

大学時代まで何気なく生活してきた私にとって、現地で 1 日 1 日を生活している人たちと触れ合うことで、「今」を生きている実感を得ることが出来たのです。明日は明日の風が吹くといった考え方も理解し、そして明日のことよりも今日や今を楽しむ。そんな姿勢が毎日を充実させるきっかけにもなりました。今日は何をしよう、どこに行こうかと時間を気にせず考えられた日々が懐かしく思い出されます。

サテ・アヤムを売る店（バンドゥン）

2 つ目の卒業後の 5 年間は、インドネシア語を活かす機会がほとんどありませんでした。しかし、他民族、他文化を実生活の中で経験して得た考え方はこの間も随分役立ち、自分の思考の枠組みが広がったように思います。ただ、毎日が忙しく、何をしようかと考えるよりも業務としてしなければいけないことが山積みで、毎日がただ過ぎていた日々でした。今という時間を楽しんでいなかったかもしれません。

3 つ目の今後ですが、今を楽しみ、将来も生産性と充実感を伴った生活を送るために、自分が何をしたらいいのか考えました。その結果、「凡事徹底」という良い言葉が見つかりました。自分にピッタリなようです。もともとは、非凡なことを平凡にする意味です。当たり前のことを当たり前にするのは難しいけれど、とても重要です。（シンプルで簡単なことですが、なかなか徹底できていません）。

現在、転職して人材開発に関わる仕事に就いています。人（人材）がどうすれば成長できるのか、人が抱えている課題について何をどのようにして解決するのか。それを考えることが私の仕事のメーンですが、解決策のひとつとして、この「凡事徹底」という言葉がまた、当てはまるのではないかと考えています。のらりくらりと過ごした学生生活や、わけもわからず突っ走っていた卒業後 5 年間を踏まえて、地に足をつけるべく、どこまで徹底できるか挑戦したいと思う今日この頃です。

このような堅く真面目なことを考えるようになったのを、旧知の友ならきっと驚くでしょう。「世も末」と私は笑って答えます。冗談はさて置き、来春で長い 1 人暮らしが終わることをご報告させて頂きます。で、皆さま、今後とも宜しくお願いいたします。

サザンクロス懇話会

～EPAで来日した看護師・介護士候補者の問題～

南十字星会の主催する「第2回サザンクロス懇話会」が5月15日に大阪大学中之島センターで開かれました。テーマは経済連携協定（EPA=Economic Partnership Agreement）で来日した看護師・介護福祉士（候補者）の問題です。08年から受け入れが始まり、看護師の国家試験2回目の今年3月ようやくインドネシア人2人、フィリピン人1人が合格。外国人合格率は1.2%でした。

懇話会では松野明久・阪大教授が「日本と東南アジアとの新しい関係」と題して基調講演しました。2国間で締結できるEPAは、それぞれの外交政策、労働政策がからみ「看護・介護では社会保障政策の違いもあって、解決すべき諸問題」が多いこと。看護師の“国際移動”では「欧米諸国で外国人看護師の割合が10%を超えるところもあり、WHOで基準づくりが進んでいる」など、EPA締結の背景と看護師らの受け入れ制度、問題点を語りました。

最後に提言の形で「看護師らをとりまくグローバルな環境は同じではなく、別々の原則・対応を取るべき」「インドネシア政府は自国の保健人材確保の観点から看護師・医師などの海外派遣促進政策はとらずに、EPAによる派遣は他の業種を考える。日本政府は自国の看護自給を目的として、給与・労働条件の改善など国内的措置を徹底する。あわせて看護師不足にはジェンダー格差を是正する政策が大切」と述べ、「日本は今後、中進国・先進国からの看護師受け入れの枠組みをつくる必要がある」などと付け加えました。

☆

続いて第2部。インドネシアから来日中の看護師候補者らを語学面で支援している渡辺重視氏（'64卒）が「日本語教育の現場から」というタイトルで、医学用語や試験問題について実例をあげて講演しました。例えば「味覚閾値」「用事溶解の薬剤」などの難解用語や「小児慢性特定疾患治療研究事業」といった連続した漢字名称は予想以上に外国人には理解が難しいことを指摘。

「病院内の会話では出てこない用語が試験に出題され、カタカナの表記が元の外来語に容易にたどりつきません。カナが読めるのと意味が分かるのは同じでないのです」などとコメントしました。

今回の懇話会出席者は、実際にサポート活動に取り組んでいる学生らも含めて34人。関心が高く、意見交換会は予定時間をオーバーするほどでした。

消息　ひとこと（敬称略）

六岡康二（39卒）=兵庫県宝塚市
敗戦で国策会社が消滅、その後の職場は語学と無縁。同期生は数えるほどになったが92歳の今、介護福祉士をめざしているインドネシア女性を支援する活動に参加しています。

藤原　剛（41卒）=東京都港区
腰を痛め、目も悪い…。老化したくないものです。

覚田　滋（59卒）=埼玉県日高市
2年前から市内在住外国人（インドネシア人研修生9人を含む）の日本語学習の指導を手伝っています。

林　喜久雄（60卒）=神戸市垂水区
10月24～25日に同期生会を計画中。滋賀県の比叡山、石山寺、三井寺をめぐる旅行です。

石川恵二（62卒）=横浜市緑区
ボランティア活動をしており、今年11月にはAPECのお手伝いをすることになっています。

堀田　実（63卒）=船橋市
昨年左足を骨折。完治した春以降は、運動と釣りで動き回っています。

扇谷竹美（66卒）=ジャカルタ
インドネシア滞在22年。年齢も67歳に。そろそろ美しい日本で良き知人隣人との絆を繋ぎ止めるべく、そのタイミングを模索しています。

宮下憲一郎（67卒）=東京都目黒区
今年4月から東急カルチャースクール囲碁入門クラスに入りました。

上野吉昭（68卒）=埼玉県越谷市
2月に心臓手術をし、今も通院中。

高田　清（75卒）=留守宅は川崎市
タイ勤務が通算11年目で、インドネシアの勤務経験より長くなりました。

兵藤圭子（81卒）=大阪府河内長野市
現在、大阪府立視覚支援学校で英語を教えていて、英語どっぷりの生活です。退職したら、またインドネシア語にもどっぷりつかりたいです。

小西浩史（87卒）=愛知県岡崎市
県の職員として産業技術研究所に勤務しています。音楽も好きで、youtubeにピアノ弾き語りをアップ。“HiroshiKonishi0222”で検索を。

横山オリエ（99卒）=茨城県守谷市
大学卒業後地元の熊本で高校の英語教師をして結婚を機に茨城へ。1男1女をもうけ9月に3人目を出産予定。

◆おくやみ申し上げます◆

清家俊雄(43卒)=大分市　死去年月不明
西村幸雄(45卒)=神戸市 09年11月
小原義男(53卒)=名古屋市 09年8月
下里和夫(54卒)=池田市 07年11月
松浦重夫(54卒)=浦安市 06年10月
小林崇浩(55卒)=神戸市 09年12月
東原嘉孝(57卒)=船橋市 10年1月
奥田邦治(62卒)=豊中市 10年1月
九里竹一(67卒)=大阪市 95年に死去
菊　隆也(81卒)=西宮市 10年6月